

昭和

四十四年

七月二十三日
第三号
（種郵便物認
行）
（毎月一回・十五日発行）

（通第二八六号）

慈

光

第二十五卷

第三号

次

園林遊戯の真趣味……………近角常観……………(1)

私の求道の歷程……………福島政雄……………(8)

光りの滝……………園田香融……………(12)

念仏詩抄……………木村無相……………(18)

和をもって貴しとなす……………花田正夫……………(21)

菌林遊戯の真趣味

近角常観

本日は雨が降りまして少数の御方ですがありますがかえって非常に気がおちついて宗教上の感想を起すに余程適していると考えます。先程から時間の来るのを待つて居りますうちに今日の講話につき種々考えて居りまして一層深く自分でも感じましたから特に今日は自分の考えを深くお話し申して見ようと思ひます。

これまで書物からではなく自ら自身にも已に実験でなければならぬことを申して居りましていつも実に横着なお話しのしようではありませんが、外の人の書かれたものをそのまま申すということをしていません。これは、或点から見れば宗教の立派なる点を云い違いを申すかとの御疑いはありません、又そう変つた書物も見ませんが、又必ずしも宗旨の如何にかかりません、極く少ない書物を心を入れて深く味わいますと、実に感想を深くひき起こすのであります。今日もその点について前より考えて居つたのに非常に感

今日の科学的天文学的に考えると無益な様であるが、宗教の極致は人生已上の事実としてそれを望むが浄土教の意義である、ソ一云う風にして高遠なる極楽世界に往くその道を五功德門と書いてある。

第一番が近門（ごんもん）即ち漸々仏の浄土に近づき往く。私は毎年一度、もしくは数度故郷へ帰る、故郷へ漸次近づくと同じようにその高遠清浄なる世界、永久の仏陀の世界に向つて非常なる望みをもって近づいて往くのである。

第二が大会衆（だいえしゅう）門で、もうその方へ往けば沢山なる人と一緒になつて往くのである。一步は一步より故郷へ近づいて見ればだれかに道々で出逢い、それ等の人々と互に愉快な話をしつつ往くのと同じく信仰上同じ道に入った人々が皆仏に等しい資格を得て、兄弟手をたずさえ仏陀の世界を念じつつ進み行くのである。

第三は宅門とある。故郷の地へ入つて見れば友人にも出逢い、あすこの川、ここの森を経て自分の家の樹が見え、その門へはいりこむ、これが宅門である。いよいよ人生を出て修行安心の宅に入るとある、もう心をしずかにして安心の位置に住する。浄土論等にも極楽の様子が実に奇麗に記載されている、無量寿、無量光の仏が主人として多くの菩薩その眷屬等あまたその周囲に居らるる、一度郷里の自

想が集まりました。度々お聞きになつた方もあり、又始めてのお方は少々分りにくいかも知れませんがお差し支えのない限りはこの講話のすんだあとでお尋ねになりますよう。

今日主に申しますのは求道雑誌にものせて置きましたが浄土教即ち教文としては三部経がありその外に論部として全体のすじを引くくめられた浄土論と云う薄い一冊がある、その中に五功德門の事が書いてありますが今日はその意味をお話します。

門は入口の意味で五門は人間が極楽へ往く五つの門である、五つのはいり口である。宗教の本義は吾人人生上の低き風俗の境界ではなく実に崇高なる理想界に向つて非常なる望みをもって仰ぎ進んで往くといふのである。即ちこの世界において仏の位は非常に高き地位である。無限の時間に一時一時に漸々とその方へ進み往く、或は頃に速に往くといふ、即ち清浄なる世界に往生すると云う思想である、

分の宅へ入れば父母あり兄弟ありて旅から帰るのを待ちうけて居つたのである。ソ一あるから極楽は平凡な書き様であると云うけれども浄土論の註釈、即ち論註には非常な無限の絶対界の様子がそのうらに書かれてある、丁度画のうらに金を置いて絹を透して自然に金の色があらわれていると同じ様である。

然ればどういふ風に往生するかと云うに、その生るとあるが、人間が生まれるとはちがひ無生の生とあるが、絶対界は吾人の所謂生まると云う如き事ではない、夢を見ていと唯今醒めたとき、その醒めた境界はその前よりズ一とあつて、醒めた時に始まつたのではない。丁度浄土へ往生するのがその通りである。生まるるにはちがひないがそこに意義がある、即ち無生の生で、その生まるる世界は蓮華蔵世界で広大なる理想の絶対世界である。阿弥陀法皇はじめ諸の菩薩の迎えたまうその世界に生まれるのである、故郷の家でわが親兄弟に久しぶりで出逢うようなものである。

第四が屋門（おくもん）とある。それはいよいよ浄土に往生して浄土の楽しみを受ける平和沈静安泰の境界で、そこに咲ける麗わしい花、愉快な有様が法味楽とある、久しぶりでうちの坐敷へ坐り御馳走をいたたく、又友人より送つてくれた御馳走も味わうというように種々の法味をいたたくのでこれについても種々書いてありますが略しておき

ます。

第五は蘭林遊戯地門（おんりんゆげじもん）である。いよいよ腹もふくれ親の処で話し、ひとつ裏庭をあるころと、あたりの景色を見廻すと、何とも云えぬおもしろい、これにたくみな喩がかいてある。即ち浄土に往生して四方をふりかえって見れば、一切の人間が苦しんでいる、それを見ては直ちにその身相応の形を現じて生死の園に再び帰るのである、即ち極楽よりこの生死の世界に生まれるのである、そうして神通自在に遊戯する無限の力をもって自由自在にその身をあらわし遊ぶのである。吾人の遊戯とは苦しみながら遊ぶのであるが心閑かに自由に散歩するときは中々愉快なものである。いわんや極楽世界からこの人生に生まれ来て思う存分人生を救うことが出来るのである。

以上はじめの四つは入の門で、第五は出の門である、即ち第五は極楽世界よりこの人生に出る門である、これは書いてある通りおわかりになるように申したのでありますが、これだけでにても結構な喩であると思います。

このことは前から知っている文であるが、近來はじめてのように新しく愉快になってきたのである、なお繰り返して申せば、この事につき適切に感じたのは今度私の親の死にましたにつきこの門を通して極楽の世界にはいるのであるということが、このたびはじめて分ったのであります。

それまでしか思えなかつた。この度は死することが恐るべきことではない位ではない、それが真の理想で、極楽へ往生すると云うことが非常な意義をもって来たのである。

この世の中において衆生済度するとはこれは宗教のつきもの、苦悶した人は御経験がありましよう、苦しんでしかんだ顔をして居る人を見てはその人に対してどうしても慰めざるを得ないのである。釈尊が王城を出て苦行せられたとき、五人の人がついて居ったが、釈尊は孤影山を出てニレンゼン河を渡り、村女の捧げる牛乳をのまれたとき、この五人はその様を見て釈尊の修行をあやしみ、釈尊をすてた。

釈尊はいよいよ成道して見れば先に我を教えたるアララカアララを救わんとして行かれ、次で五人をも済度せられたのはこれ自然の勢である。自利成就すれば利他はこれについて来るのは宗教のつきものである。信仰を得たものは社会人生のためアーしたいユーしたいと思う、出来るものならば飽くまでやるのである、これが宗教の本義である。

しかしながらこの度感じたのは心丈けはあれもこれも思いますが中々出来ないことと云うことを経験して居る。小さい智慧や人間のあわれな考えでやるのをかの仏にくらべて慈悲である智慧であるなどは実にダイソレタ横着なことと云わねばならぬということを感じたのである、唯これみな

す。

大谷派の人、故笠原研寿氏は南条文雄氏と共に明治九年に英国に留学されて、同十二年、氏は梵語学者であったのでマックシュミラー氏の許へ行かれて日夜精勵して居られたが十四年の六月頃マックシュミラー博士とこの両氏は仏教の経文翻譯のためモールウエルンの岡の閑地に寓して居られた。その時共に西方の空に赫奕たる日没を見て笠原氏は博士の前に進みて、西方を指し、彼処は即ちわがいわゆるソキヤパッテイ（蘇佉伐提）即ち安樂浄土の東門である、我等の往生する門であると言われたことがあった。

その後笠原氏は肺疾のため十五年十一月に日本へ帰えられ、翌年七月に東京大学病院で亡くなられた。その報せが博士の許へとどいて博士は深くこの訃音をかなしみ、氏のために一文を草してロンドンタイムスへ出された。その結文に、笠原氏はかねてモールウエルンの岡の上で自分に言うたことを記しているが、今思えば笠原氏はその極楽の東門へ入って互に親愛せし人と俱に相会し、親しく阿弥陀仏を拜し奉ることと信ずる、とこうう風を書いてあります、その極楽の門が唯今申したその門である。

私は従来信仰と云うときにおいてこの近門、大会衆門、宅門、屋門、蘭林遊戯地門の五門がいよいよ仏の世界へきつと往く、正しく往くと云う地位を言うたものであると、

報恩の万分の一にすぎぬのである。さればとて従來の事を捨てるのではない。極楽の真実のことは仏になって再び人生に出てくるのがその済度と云うべきである。歎異抄に、慈悲に聖道浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものをあわれみかなしみはぐくむなり、しかれどもおもうがごとくたすけとぐることきわめてありがたし。また浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもておもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり、今生にいかにかいとおし不便とおもうとも存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし、しかれば念仏申すのみぞすえとおりたる大慈悲心にてせうろうべきと云々。

浄土の慈悲は、この世界へ来て思う存分たすけとげることと出来る、その本當の意味が解らなかつたが、今に至ってそのころを感じ来るのである。

人間のすることは浄土の慈悲のことを思えば実にいさかななる慈悲に過ぎぬのである。この肉の体を変じて仏の国より来てはじめて十分の慈悲も済度も出来るのである。

支那の曇鸞大師は魏から引統いて梁の時代に居った人で浄土論の註を書かれ、そこに法華經の普門品三十三身のことを引用されてあるが、人が遠い海原へ船で行くとき忽ち暴風が吹きすさむ、或は非常なはげしい戦に出たかた場合、心に一心に観音を念ずれば今までの恐れは忽ち消

えうせてしまうなどと書いてあるようなのが、これ即ち極楽の世界より顕われてあることを云うたものである。この人生上にソ一云う力が種々の上にあらわれてある。この度私の父の死に逢って父の広大なる恩を受けしも皆仏の力の現われであると思う。この人生は、更に人生には無い偉大なる力の現われたる人生である。故に前に云った様に人生より極楽に進み行く入の門と、極楽から再びこの人生へ出る出の門との二つの門となる。

それで私が講義を始めるときに非常に感じたのは、親鸞聖人が、真宗と云う組織をせられたその始まりに、謹しんで浄土真宗を案ずるに二種の廻向あり、一者往相、二者還相なり。

往くと還るとの二つでこれ真宗の極致であって、今申した人生から浄土にむかい、浄土から人生へ来るとキツと始めに書いてあるのは、今述べた浄土論及び論註の極要領をとって、他力の信仰の極致をあらわされたのである。その人生に来て仏力によって済度すると言うのが真宗である。御本書の書きはじめにそれが書いてあるのである。死後涅槃の境は理想の極みである。ソウ思わぬうちは往相還相はさほど感じなかったが、今度はそれを非常に感じて来たのである。この親鸞聖人の御心がハッキリ感じられる、この二種の廻向が他力信仰の骨子である、それが今日今時まで

ととする、その仏の心は三通りの心となる。これは、一智慧門、二慈悲門、三方便門。論註の釈によれば智慧のことを解釈して大層よく書いてある、進むことを知って退くを守る即ち、知進守退、進退をよく守ると云うことを智という。自分のために頓着せぬということである、それは無染清浄心が智慧門の心である。二に慈悲門とは拔苦を慈と云い、与楽を悲という、故に衆生の苦を抜きて楽を与える、安清浄心とある。三に方便門とは正直を方と云い、己を外にするを便という、一切衆生をあわれみて自分をよくする心をやめる楽清浄心と云う。

私はこの廻向の下を見て非常にありがたく存じました、ここが要点で、その廻向は浄土論の文面よりみれば吾人がすることである、その廻向は才一、身をすてて人の苦を抜き楽を与え、己を外にして正直なることを云う。サテこういうことが出来るか、この世界においては到底出来ない、その通りにしたいが出来ない。ここに親鸞聖人はこの廻向を如何に見られたか、この廻向を断言して、廻向は凡夫がするに非ずと極端に言い放たれた。この廻向は、法蔵菩薩がものせられた廻向である、仏陀のものせられた廻向であった我々凡夫のする廻向でないと大変化して極端までもち行かれた、その極致の無限の味のあるところである。仏に向って廻向する、死んだら亡者に廻向する、吾人の力で何

私の経験に触れなかったのである。唯ハンコで押した文字ではないので、これは実に偉大なる御心であるのである。

聖人は晩年に二門偈というのを書かれたが今まで云うた入出二門が眼目となつてある。聖人の名、親鸞と云うのも始めの名は緯空で、次に善信、晩年に親鸞とせられた。これは浄土論の著者天親菩薩の親と、論註の著者曇鸞の鸞をとって御自分の名とせられたのである。この御本書もこのお二人から来ている。読むときザーツと書いてあるように見るが、そこが骨子である。入出の二つをば親鸞聖人がそこへもち来たつて、そこに尽きていることと見られた。

その上に廻向とある、これを御考え下さるよう浄土論に行者の行が五つある、礼拝、讚歎、作願、觀察、廻向の五念門とある。浄土論の主義で、仏を信ずると同時に五念門を得る、そのことは自分のためだけでなく人のため、人のためとして往く、その五念門の原因で才五の廻向をとりて来る。

近門は礼拝に、大会衆門は讚歎に、宅門は作願に、屋門は觀察に、園林遊戯地門は廻向に、ちゃんとあうようになっている、これが普通の見方である。その廻向の下がよく書いてある、実に結構である。回とは回わす、向はむける、自分の方にあるものを向うにむける、我等が仏にむけることである。然るに親鸞聖人は、仏より衆生に向けることが出来るのか。実に親鸞聖人は凡夫の廻向を総て高き仏陀にもち行かれたのである。絶対の仏陀にもって行かれた吾人は罪惡の心、雑毒の凡夫、然るに大悲の仏陀が吾人に代つて才ニモカモ回向して下さるのである。

これを要するに浄土教の極致は仏を高められるだけ高めてその仏にもっていった、その廻向を仏よりもらいうけるすべて仏の廻向であるから二種廻向其に仏の廻向である。仏の廻向は何であるか、本願力の廻向である。

才十一願は往相の願、才二十二願は還相の願、それを総括したるが才十八願である。論註の終りに出ているように何もかも皆仏の力である。これやがで信仰の力で仏陀が高くなればなるほど吾人は軽く上る、たとい吾人、人間は無限なるも仏陀円満の願力によりて更に恐ることなく進むことが出来る、善も悪もいらぬ、仏陀の絶対の力を思い、願力の強縁によりて仏陀の御前に往くのである。

親鸞聖人の書かれたものは皆自分の経験実行より来るのである、自分の師匠法然聖人は大勢至菩薩である、その肉の形ながら親鸞聖人に智慧を与えられた。聖徳太子の御言葉は仏の慈悲の廻向であるとチャンと確信して居られる、それは皆信仰の一念に得られる力である。そういう力が無尽に働いて常に仏力につつまれていられる親鸞聖人の人生観にはそのことが歴々と見える。聖人に映するもの皆仏の

力ならざるはない、仏に向いてありがたく思えば仏の力に
よっていつの間にかこの世界に安心している、その仏の
力は即ち回向である。親鸞聖人の宗旨の骨目は皆御自身の
実験の上より得られたものである。そのことを私は今更ら
の如く感ずるのである。和讃に

観音勢至もろともに 慈光世界を照耀し
有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり

安楽浄土にいたるひと 五濁悪世にかえりては
釈迦牟尼仏のごとくにて利益有情はきわもなし

聖人は釈尊もその一現象と見られたのである。死後の世
界の広々として望みがあるのみならず、この世界において
もなお死後より再び此世に出て来ることの如何に興味多き
か。本日は偉大なるすじをお話しすることを得まして自分
も深く感ずることあります。宗旨という点でなく、人間
内心の実験について益々味わわして貰いたいと存じます。

(求道一卷 七号。日曜講話)

法然上人の御歌

さへられぬ光もあるををしなへて へたてがほなるあさ
がすみかな

月影のいたらぬ里はなけれども ながむる人のこころに
ぞすむ

阿弥陀仏と申すばかりをつとめて 浄土の莊嚴みるぞ
うれしき

池の水人のこころに似たりけり にごりすむことさだめ
なければ

露の身はここかしこにてきえぬとも ころはおなじは
なのうてなぞ

阿弥陀仏と十声となへてまどろまん ながきねぶりにな
りもこそすれ

私の求道の歷程

福島政雄

の気魄に満ちた文章に打たれて読んだのである。

然るに大学生時代に既に親鸞聖人への御縁も開けかかっ
て居た。これは友人から多田鼎師の「恩寵の宗教」という
著書をもらって読んだのが始めて、その後佐々木月樵師の
「親鸞聖人伝」を読んで、史上の親鸞と伝説の親鸞とが一
つになって私の心に銘記されるようになったのである。聖
人の態度が、導くという態度でなく、御同胞御同行として
親しまれるという態度であることが私の心に染み込んで来
た。併し私の現実生活は如何であったか。自分の足下を見
ない理想主義であって、一面においてはトルストイの言葉
などにかぶれて、人類の絶滅なお可なり、男女の乱れは許
すべからずなどと豪語していたこともあった。その私は卒
業後教育界に入って「愛」を高調し、自分こそ教育愛の権
化であるかのような誇大妄想をいだいていた。

併し現実私の理想を裏切った。教育愛の権化と妄想し
ていた私に、真に親しんで来る生徒は一人も無かった。加
御振舞御書」などの自叙伝的文章や「如説修行鈔」など

うるに結婚問題について私は、両親に対して我を張って、随分両親を苦しめた。それやこれやで私は衷心大いに淋しくなっていて、且つ苦しんで居た時、近角常観師の信仰のお話を聴く御縁が開けた。阿闍世王入信の文をテキストとせられた近角師の連続一週間にわたる信仰講話はしみじみと私の心の奥に徹した。此の時から私は念仏者となり、親鸞教徒となった。いわゆる弥陀の誓願が私のいのちの底に徹して、それからの私は自分の浅ましい煩惱の姿が見えはじめた。それは私の二十六才の七月のことであり、自分の姿が徹底して見えはじめたのは二十七才の三月からであった。「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し云々」という「教行信証」の信の巻の聖人のお言葉が我が身にしみるようになったのである。「歎異抄」の精神が私の心にひびくようになったのもその時からである。

煩惱熾盛

三十台に入ってから私は矛盾の存在ともいふべき有様であった。私の専門が教育学であってペスタロッチやプラトンを読み始めたのが三十三、四才の頃からであった。ペスタロッチからは先ず親心、子心ということ教えられ、プラトンからは節制・勇氣・智慮・正義などの徳について教えられた。併し現実の私は三十二才にして母を亡くし、三十七才にして父に死なれ、なおその前に長女が死し、親

にも興味を感じはじめていた。それは佐々木月樵師の講話を聴いて善財童子の求道物語に感じてからのことであった。佐々木師から「真に仏教に入ったならば、仏教々々と言わなくなる」と言われた一言が私の心に染み込んだ。併し此の時代の私は最も仏教臭い存在であったと思う。

西洋から帰ったのが三十九才の夏であったが、ドイツの田舎の家庭で純良な少女姉妹と親しくしたり、南独の田舎の小学校の見識ある女先生と一週間語り合ったりした印象が深く残っていて、何となく煩惱肯定というような心持になつていた。近角師に向つて、煩惱も大切なものだと思いません、など言つて、ひどくお叱りを受けたこともあった。西洋の現実煩惱肯定の生活が私の心にこびりついていたのである。

親心を仰ぐ

父を亡くして直に西洋へ旅立ち、一ヶ年ばかり暗い心持でいた私が、三十八才の春にギリシヤ旅行をしてから心が晴れて来た。「永遠の青空がほほえむ」とドイツ人の言うギリシヤの風光は、私を慰めたのである。

それと同時に、ソクラテスという心持が動いて来た。プラトンの著書を通じてソクラテスのことを調べはじめた。ギリシヤ語も一寸かじつて見たりした。ソクラテスへの余程の感激を持って帰朝したのであった。顔淵が喟然（い

しい友や私を熱愛してくれた伯父が死ぬるといふようなことが続いて人生の無常という実感が私の心に徹した。

母を亡くしたことは、殊に大打撃であつて、それから私の煩惱がひどく湧き立ち、亡き母を求めるといふ心持が転じて異性に彷徨するといふ有様になった。源氏物語を素読して光源氏の君の心境に一種の同感を感じるようになった。カラマゾフ兄弟なども感銘をもつて読んだのである。

一方ではこの時代の私は信仰を誇り、その心持を押し売りするといふ飛んでもない状態であつた。近角師の信仰によつて私の心が転じたことは嘘ではなかったが、併し近角師の口まねをして信仰の論理といふようなことを勝手に作り出して、その論理をもつて相手を追求して痛快がるという有様になり、一かど自分は信仰の人であるかのように気取つていた。しかも現実の自分は愛欲に彷徨するといふ有様であつて、三十七才から三十九才までのドイツ国在留の頃がその頂点であつたと思う。今から思えば、三十台の私は最も甚だしい矛盾の存在であつたのである。

併しこの時代には「大無量寿経」の悲化段・五悪段にひどく感激して、その「五悪段」とキリストの「山上の垂訓」とを比較したりしていた。二十台の理想主義が三十台の自然主義に転じたといふわけでもないが、煩惱熾盛の自分がむやみに動いていたのである。この時代にはまた「華嚴経」(ぜん)として孔子を仰いで嘆じたといふその心持には及びもつかないが、それでも私としてはソクラテスの足許にも近寄れないという感じがあつたのである。

帰朝後しばらくはソクラテス関係のものを読んでいたがやがて世界の四聖と並んで劣らぬ大人物を日本の歴史の上で求めたいといふ心が起つて聖徳太子を思いついた。これは、私としては嬉しいことであつた。

昭和五年の秋のことであつたか、博多で鹿子木員信氏に會つて「これから私は法隆寺に初めて参るのであります」と言つて、鹿子木氏から「その齢になつてはじめて法隆寺に参るのか、それだから日本の教育が駄目なのである」と叱られたことも懐かしい思い出である。

それ以来私は真剣に太子讃仰の一路を進んだ。幾夏か法隆寺に参籠して、佐伯定胤下から、法華経、勝鬘経、維摩経の御講義を聴いた。法華経に対する私の親しみは二十四才の春から始まっている。その後久しく法華経から離れてはいたが、四十五才の夏、法隆寺で御講義を聴いてから、その一乗法の深い精神が少しわかり始めた。併しそれより前に広島で白杵祖山師から長者窮児の喩についてお話を聴いてから親心を仰ぐということが私の心持に染みて来た。「親は此の世のいのち終ると共にその全生命が子のいのちに入る」といふお話を聴いて、亡き親によつて生きた仏陀

のいのちを感じるということに気がついて来た。

その時以来私の念仏には亡き父母の生きたいのちが通っていることを感ずるようになった。そして法隆寺で朝の勤行の時に佐伯猊下が「南無慈父悲母」と唱えられて皆々それに唱和した時、私は涙が出る程に感激した。

心が開ける

五十才を超えた頃から私の心がよほど明るく開けて来た煩惱々々とはかり言っていた私が少しく変って来た。五十才で広島から新京に移り、建国大学の有志の青年からの請に応じて「大無量寿経」を二ヶ年ばかり講ずる間に、その上巻の四十八願や浄土の莊嚴などというところが親しく感ぜられるようになって来た。同時に親鸞聖人の「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば至徳の風静かに衆禍の波転ず」というお言葉も、我が身の上に少しく味わわれるようになって来た。青年達との接触の上で私の心は生き生きとしていた。殊に民族協和ということで、私の心は他民族のことも考えに入れるというようになった。

親鸞教によって全世界が衆禍の波転ずという趣きになるようにという念願が終戦後の私には現に深くなっている。

世界の聖賢の教えに対する私の心持ちもはっきりして来た。心が開けてきた。二河白道の喩で群賊とあるのは、実は群賊ではなく、私の煩惱心ゆえに群賊と見えたのであ

光りの滝

——池山栄吉先生のこと——

菌田香融

名古屋で発行される『慈光』誌で、池山栄吉先生の生誕百年記念号が特集されている(昭和四十七年十月号)。もう三十年以上も前に亡くなられた池山先生のことを私が知るよしもないが、先生の御名前だけは、死んだ父からよく聞かされていたので、特別の関心をもって早速に読ませていただき、あらためて池山先生のお人柄に畏敬と親愛の念を感じた次第である。左に示るすのは、同誌を拜見した際の私の備忘のノートである。

池山先生は明治六年(一八七三年)東京でお生まれになり、昭和十三年(一九三七)十一月に、数え年六十六才でお亡くなりになったから、今年はず度生誕百年目に当るわけである。本誌の編集者は「世間一般の常識からいえば、亡き人の御命日を記念するだけであるのに、釈尊や親鸞聖人の御生誕は、私共の魂の誕生に直結するから、降誕会や誕生会が大切にされるのである。それと同じ意味で、私共

で、実は私のいのちの有様を照らす聖賢であった、ということがわかって来た。聖賢のきびしい教の前に死ぬるより外はなかった私が、念仏に生かされて、さて振りかえって見れば、群賊の姿は消えて東西古今の聖賢の教えが私の心の鏡となって、私の姿を照らし出していられる。釈尊はもちろん、孔子もソクラテスも、キリストも、私の姿を照らし出す尊い教えを説いていられる。私はその心の鏡の前に慚愧の自分のすがたを見る。

× × ×

親鸞聖人はその晩年において、殊に心が広くひらけていられる。よろずの仏菩薩をおろそかにするな、すべての天神地祇、仏菩薩の御蔭で今の自分はある難い仏法に値遇しているのである、と仰せられている。私は若い時からこの聖人の包容的なお心に感じていたが、いま老年になっていよいよ深くそのことを感ずる。

晩年の聖人のひろびろとしたお心、それは世界の平和の根元となる御教えとなるのではないであろうか。

「しからば諸仏の御おしえをそしることなし、余の善根を行ずる人をそしることなし、この念仏する人をにくみ、そしる人も、にくみそしることあるべからず」という御教えこそは世界の平和の根元となる。今の私はこの御教えに深く導かれているのである。(四八・一・八十四才)

にとつて池山先生の生誕百年の日は、忘れることの出来ない大切な年である」と述べていられるが、もって池山先生の感化のいかに強烈なりしかをうかがうことができる。

青年時代の先生は、東京のドイツ語協会学校(現在の独協大学の前身)に学んだ。生まれつき正義感の人一倍つよいお人柄のようであった。近角常観師の弔辞の中にも「君はすこぶる温厚篤実の人にして、誠に孝心深く、かつ社会民衆に対して同情心に富み……」と述べられているが、社会的な正義感にもえる若い日の池山先生が社会福祉の事業に一生を献げようとされたのも不思議ではない。

しかしながら、この頃の池山先生の立場は、素朴な社会正義派を越えるものではなかった。いってみればそれは歎異抄の「聖道の慈悲」であった。

聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、悲しみはぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐることきわめてありがたし。……今生に、いかにいとおし、

ふびんと思うとも、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし云々。

先生が真面目な正義漢であればあるだけ、「聖道の慈悲」の限界につき当らざるをえないであらう。純粹無垢の正義感にもえる青年の胸にも、こうした疑雲が執拗に影を落すのであった。

この辺の事情を、近角師は次のように述べていられる。

「君は……理想と現実の矛盾につきて少なからず煩悶懊悩をした様であった。その極みに何気なく心頭に忽然として浮かび出でた歎異抄第二章の有名な「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」という一句であった」

また同じことを晩年の池山先生に親炙（しんしゃ）された榊原徳草師は、「そんな先生が社会事業を志し、明治三十年頃に労働福祉を提唱され、種々苦勞された挙句、自身自身の中に名利追求の念のはげしさに気付かれ、歎異抄に開眼せられて念仏者となられたのである」と述べていられる。

近角師は「理想と現実との矛盾」といい、榊原師は「自分自身の中に名利追求の念のはげしさ」をみとめたからというが、これは同じ一つの盾の両面である。要するに池山

家宗教関係の問題につき意見を同じうし、君が研鑽の結果をもたらし、真面目に真一文字に馳せ参ぜられたこともありません。又三年の間、共に洋行して日夜日本宗教界のことに心を砕き、苦心慘澹した事もある。一々これを回想するに、今更ながら感慨無量である。されど中心として君と私とを結びつけたものは「歎異抄」一冊である。

純情にして多感な二人の青年が、遠く故国を距てたドイツの客室で、宗教問題や労働福祉問題にとりくみながら、一方では「歎異抄」を中心に、熱っぽい議論を交わしていた情景を、この文章の行間から読みとることができる。

明治三十四年、三年ぶりに帰朝された先生は、当時東京にあった真宗大学（大谷大学の前身）の教授となった。又社会事業の根拠地として、神田須田町に煙草局徳光社を創立し、苦学生を集め、社会福祉と労働問題を共に考究したのもこの頃である。

しかし日露戦争が始まったので煙草は政府の専売となりこの事業もうまく立ちゆかず、世間からは、洋行した大学教授が煙草の小商売をしていると嘲笑される始末であったその後、先生は病魔の犯すところとなり、ついに真宗大学を辞任し徳香社も解散しなければならなくなった。しばらくは浪々の身を東京府下に養っていられたが、大阪に移

先生は、社会福祉事業を熱心に推進してゆかれる中で「聖道の慈悲」の限界につき当られたのである。歎異抄第四章には、前に引いた文につづいて

しかれば念仏申すのみぞ、すえとおりにたる大慈悲心に
てそうらうべき。

とある。先生は歎異抄に導かれて「浄土の慈悲」の立場に到達されたのである。

池山先生がよなき念仏者になられたについては、何人も篤信の御母堂の感化と、近角常観師との道交を指適する。当時、東本願寺では、光演法主を中心に宗教法案問題にとりくみ、宗派内外の識者を集めて意見を求めていた。池山先生も法案問題について意見を述べられ、近角師に意気投合してその活動をはじめ、衆議院を通過した法案も貴族院で審議未了となったのである。こうしたことから東本願寺は先生と近角師を欧州に派遣することになった。近角師は世界の宗教事情の研究、池山先生は労働問題と社会福祉問題を研究された。この三年間のドイツ留学、とくに近角師との親交は念仏者としての先生の今後を決定的なものとした。再び近角師の弔文を引くと、

如何なる前世の因縁にや、君と私とは兄弟とも謂うべき交りを結ぶこと丁度四十年になります。その間には国

り住み難澁な生活が続いた。明治三十九年に近角師と沢柳政太郎氏の推薦で岡山の第六高等学校のドイツ語の教授となった。そのころは先生の生涯における最大の悪戦苦闘の時代であった。「聖道の慈悲」のカベにつきあたり「浄土の慈悲」の光に照らされながら、なお宿縁の開發せざる暗黒の時代であった。

先生の信心が開発せられた年、近角師のいわゆる「何気なく心頭に忽然として」歎異抄の第二条の一句に電撃のごとくに打たれたのは、岡山へ移ってから数年後の大正三年先生四十二歳の時であった。

親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり。

この一句を先生は「親鸞」とあるのを「池山」におきかえ「よきびと」とあるのを「親鸞」におきかえて「聖人もそうせられたのか、じゃあ池山も！」と、口をついてお念仏が浮かび、「光りの滝」をあげたようであったと云われた。先生のその後の生涯のすべての源泉はこの一句にあった。「光りの滝」というのは、この回心の際の体験をそのままに表現せられたものであらう。

思えば長いさまよいであった。篤信の慈母に育てられ、

近角師にめぐり会い、生命の書たる歎異抄をひもといたこともいくたびであったか、それにもかかわらず自分の殻が破れず、社会事業に失敗し、病を獲、やっと六高の教授となって生活は安定したけれど、内心の懊悩はいよいよさびしく、心身ともに矢折れ力尽きて数年、幸に宿縁が熟してさんざめく弥陀の心光に照らされた感激、それが「光りの滝」という表現に活写されている。

榊原氏の回想記によると、先生の居間にはこんな色紙がかけてあったという。

「よろこばぬにて 一道」

この書体が印象的で「よろこばぬ」のぬの字が実に太く悪筆で書かれ、そこそ毒蛇悪竜が、煩惱具足してのたうちまわっているような感じだったと。いかにも先生の求道の歷程を物語るかのような話である。

○ 大正七年、先生四十六歳の時、清子夫人に先立たれた。

夫人は時に三十九歳、病氣は胃ガンであった。十九をかしらに五人の子供を残して亡くなったのである。長男の池山寿夫氏の追憶談が、人間池山栄吉の一面をよく物語っている。

人様からよくお父さんは静かな、あかるい方で、腹を立てたりなどせられたことのないお方でしたね、といわ

時六高生だった北岡行男氏は「池山先生のプロフィール」を次のように描く。

思索型青年であった私には、相対を超えた絶対の境地は大いなるあこがれであり、先生はその具現者としてゆるぎなき大盤石、底しれぬ深淵のような人格者のように見えました。先生は人並より丈低く瘦型でやや猫背でありましたが、尊敬のレンズを通して見たお姿は大きくクロアズアップされました。教壇上の先生の御顔ばせ、長く濃い眉毛と口びげ、顎びげを貯えられた荘厳なお顔、お咳き、一言一句、教壇を歩かれるお足どり、すべてが軽やかさの中に莊重さ、奥ゆかしさがうかがわれ、時には冷厳にさえ見えました。近づき難い畏敬の対象でしたと。

○

岡山市内の光清寺で仏教青年会の法話会がよく開かれ、池山先生も度々出講されたようである。法話では、ニイチエのツアラトストラとゲーテのファウストが引き合いに出された。やはり六高生であった舟岡省五氏（京大名誉教授）も、この光清寺で先生の法話を聞いた一人である。その時は「先生は非常にたくみな話術でファウストの第一部を話されたが、第二部になると急に言葉もあらたまり、ファウストの天国願求の心境を説明せられた」という。

れますが、一面では随分はげしい性資をもっていたように思う。私が一番びっくりしたのは母の死んだ時でした。お葬式の時、沢山の方々がお悔みに来て下さるのに、父の姿が見えない。お父さんは一体なにしているんだろうと思っていました。

父はそのすこし前に、俺はここに居るから、お前たのむと云って、隣りの部屋に屏風を立てて、その中に坐って出て来ない。私は父も挨拶に出てくれた方がよいのではないかと思ひ、そっとその中をのぞいて見ますと、そこに思ひもよらぬ父の姿を見たのでした。父は絞れば落ちる程に濡れたモミクチャにしたハンケチで眼を押え。顔もようあげ得ないで悲しんでいるのでした。その姿を見た時、ハッと思ひ、とっさに父に気づかれぬようにして元の座にもどり、ご挨拶を続けたのでした。父は野辺の送りには行きませんでした。私は母を送りつつ、送ってゆく母はなきがらだ、母はあの屏風の蔭に父と居られることだったと思ったことでした（文取意）

○

先生が絶対他力の信仰の体験者であることは、やがて六高の生徒に知れわたった。むしろ教壇に立つのは、ドイツ語の教師としてであったが、徳孤ならず、その信仰の徳香は、多感な青年たちに大きな影響を残したのであった。当

先生は晩年、大谷大学教授に迎えられ（昭和三年）京都の北山、蓮花谷に閑居し、方々の法話にも出かけられた。

そんな時も度々ファウストに論及していられる。

これは榊原氏の文によるものだが、ある秋、東本願寺の報恩講の記念講演を高倉会館でされたときの講題は「百翁ファウスト最高の刹那」であった。この劇詩の主人公ファウストは、悪魔のメフィストフェレスを引廻わし役にいろいろの世界を経験する探検心の権化であるが、百歳になったファウストが、「刹那」に向って、「止まれ！お前はいかにも美しいから」と叫んだとき、最初の約束に従って死に到るのである。それは死であって、死ではない。その「最高の刹那」を、池山先生は聖人の「自然法爾」の境地と二重写しにして味わわれたのであろう。

先生はまた、このメフィストを、日本ものにすれば、芝居の「玄治店（げんじたな）の蝙蝠安（こうもりやす）」みたいな奴だ、といわれたそうである。あのいやらしい、そして欲が深くてずるい蝙蝠安、赤い裏の女物の着物を着て細紐をしめた厭な奴、それがメフィストである。先生は人間の煩惱をこのメフィストに見立てて、反省の糧とされたのであろう。

○

実をいうと、私の父なども、内では法衣をまとうて念仏

を説き、出でては、長らくドイツ語の教師として教鞭をとって来た。親鸞とゲーテを中心とする楕円形の中で生涯を過ごしたようなものである。そんなところから、池山先生には特に親近感を持ったのであろう。私たちをつかまえてしばしば池山先生のことを聞かせてくれたことは、はじめに述べたとおりである。

父の遺書「滞独雑記」の中でも「他日ドイツの真宗史が書かれる日も少しあるとすれば、その第一頁に池山栄吉先生の名前が特筆大書されねばなるまい」と述べている。それは主として、池山先生によって大正八年頃はじめて歎異抄の独文訳が試みられ、それが、現在も有縁のドイツ人たちによってさかんに愛読されていることを指していったものであるが、ドイツ精神の象徴といふべき文豪ゲーテの晩年の思想の中に、日本精神の結晶といつてよい老親鸞の信仰の極致に相通するもののあることを見抜かれたところにおいてこそ、いわるべきものではなからうか。

ちなみに池山先生が近角師とともにベルリンに滞在せられた頃、私の祖父（蘭田宗恵）もまた同地にあつた。明治三十四年四月八日、近角師や祖父などが發起人となり、彼地に滞在していた日本人を集めて、花祭りを催したことが祖父の滞在日記に記録されている。花祭りの行事は、ベルリンで始まり、それが日本でも行われるようになったらし

念 仏 詩 抄

じ か づ け に

波がヒタヒタ

うちよせる

かわいた岸に

うちよせる

かわいた砂に

じかづけに

御名がヒタヒタ

うちよせる

かわいた胸に

うちよせる

かわいた心に

じかづけに

ナムアマミダブツ

い。このときの記念撮影が私の家に残されているが、十三人の留学生の姿が見え、近角師と祖父が法衣をまとい、巖谷小波、松本文三郎、美濃部達吉、姉崎正治等々の人々が写っている。その最前列に池山先生の姿も見える。先生は私にとって二重にも三重にもなつかしい人である。そして池山先生の存在は、既成教団の姿に失望しがちな私たちにとって一条の光明を与えてくれる。

昭和四十八年一月 『静炬』

徒 然 草 (三十八段)

しいて智をもとめ、賢を願う人のために云わば、智慧出でては偽りあり。才能は煩惱の増長せるなり。つたえて聞き、学びてしるは誠の智にあらず。いかなるをか智といふべき。不可は一条なり。いかなるをか善といふ。

まことの人は智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か伝えん。これ徳をかくし、愚をまもるにはあらず。もとより賢愚得失のさかいにおらざればなり。

木 村 無 相

ナムアマミダブツ

あ あ

ところが

かわいて

かわいて

かわき

きつて

ああ

ナムアマミダブツ

植物園にて (一)

みんな

咲いている

おもしろい

おもしろい

みんな
歩いている

おもい
おもい

植物園にて (一)

蟬が鳴いている
いま鳴かなければ
というふう

蟬よ

植物園にて (三)

ひぐらしや
ただ念仏の
ほかはなく

夜半に

夜半の静けさ
身にしみて
しみみもうす
ナムアミダ

ああ
身の罪(つみ)よ

ナムアミダブツ称うべし

深くというは

仰せのまま

わが機いろわで

仰せのまま

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

それを信ずと

もうすなれ

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

むこうから

砂をしほっても

水は出ぬ

私をしほっても

信は出ぬ

眞実信心

むこうから

それさえ

花田先生の「人間の原点」を拝聴して

身の幸(さち)よ
悲喜こもごもに

ナムアミダ

ウソである

ウソである
ウソである
わたしのすべてが
ウソである

朝のめざめの
かなしさに

み名となりれば
いやさらに

ウソである

ウソである

わたしのすべてが
ウソである

深く信ず

// 弥陀大悲の誓願を
深く信ぜんひとはみな
ねてもさめてもへだてなく

愚かな愚かな

わたしです

それさえしらぬ

わたしです

無慚無愧の

わたしです

それさえしらぬ

わたしです

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

そのまんま

なんにもわからぬ

そのまんま

たすけたもうと

ナムマンダブツ

ミダのおおせの

そのまんま

ナムマンダブツ

ナムマンダブツ

昭和四七年九月

和をもつて貴しとなす

花田正夫

一九七三年一月二十八日。ベトナムの停戦協定の調印をめぐって各地のニュースが乱れ飛んでおります、ともかくも明るいニュースの一つであります、現地の人々はあまり喜ぶ姿が見られない、何か大きな不信感が心のかげりとなつてゐるとのことあります。長い年月、フランス、日本、次いでアメリカ等の外国軍隊による支配をうけた国民には、一応の喜びはあつても、今後の難問題が山積して、微笑を消しているのでしょう。私はこの機会に、かねがね導かれております教をたどりながら、真実の和平ということとを私自身の問題として省みたいと願つて筆をとりました。

さて「戦争と平和」の問題は、人間に与えられた最も古くして常に新しい課題であります。しかも平和は万人が同様に求めてやまぬものであります、歴史の現実、或は対立抗争するか、或は妥協して和平を結ぶかはしてはななく繰り返しており、利害得失の如何によつてどちらにでもの斗争の姿を指摘されて「人皆たむろあり、さとれるものすくなし」とあります。「人は自分の弱さをおぎなうため人を味方に入れて徒党をつくるものだが、これが正しい民主主義をさまたげるしこりである」と云つたルーズベルトの主張もよく似たものであります。人間の生存する所に自然にグループが出来ますことは誰しも経験いたしました。同郷、学友、同志、政友等々で、それによつて夫々の生活に非常に便利するものであります、これがややもすると他のグループを排撃する基地になります。相手のグループを理解せず、唯我が党の利益の一点張りとなるとき、あとは力と力の対立抗争の修羅場となります。

この現実に対して太子は「我よしみすれば彼あしよし、彼よしみすれば我あしよし。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫（ただびと）のみ、よしみあしみすることわり誰かよく定むべけんや、相共に賢く愚かなること、みみかねのはしなきが如し」と、ひとりよがり立って相手を責めてゐることの愚かさをきびしく教えて、独善の慢心を砕いて下さつてゐます。私自身随分前のことでありますが、相手の非をいきどおり、身心共に火と燃えていた日、街頭を盲啞学校の生徒が手を執つて歩いてゐるのを見て非常に教えられました。盲人に啞者は目を借し、啞者に盲人は口を借して、街を歩き、買物をし

走るのであります。かつて日・独・伊が手を結んで、米・英・仏・ソと抗争し、日・独・伊が敗れた後、勝つた国の間でまた冷戦がはじまり、又、同じ主義を持つ中・ソの間は平和で自由なはずなのに、事実はきびしい国境の緊張となつております。

これはひとり国際間の現象ばかりでなく、国内の政治・産業・教育等々諸般の上にも、またせまく職場や家庭内でも同様なことが繰り返されております。西欧の諺に「地獄への道は美しい理想の花で飾られてゐる」とありますが、悲しい現実としてうなづかされます。

さて、こうして現実の上に立つて、聖徳太子の掲げて下さつた「和をもつて貴しとなす」の金言をどう身に頂くことが出来まじょうか。これは単なる理想の花でしじょうか、私自身の上はどう実を結んで来るのでありまじょうか。太子はこの光を掲げられると共に、現実の相対五分五分

で無事に暮しているが、もし盲人が啞者をそしり、啞者が盲人を侮つただけいゝのでは世間の道は渡れない。私自身も片輪車で不完全極る身でありながら相手を責めてばかりいる愚かさが知らされ、太子のこの仰せに心うたれました。

さて太子がこのように「共にこれ凡夫のみ」と仰言うらには、叔父君の崇俊天皇を殺害した閼族の蘇我馬子に対する太子の苦悩が深刻であつたと察せられます。もし太子が武器を持って馬子を亡き者にされたとすれば、その子入鹿は太子を恨み、そこに恨みとのろい修羅場が子々孫々に継がれるでありまじょうし、かと云つてそのまま傍観してゐるだけでは馬子の横暴はいよいよ盛んになるばかりであります。こうした窮地にあつて太子は仏心にならざられたのであります。開眼せられた太子の心に「馬子はひどい、悪人だ仇敵だとのろうてゐるが、それを責めてだけいゝ自分は同じひどい人間であつた」と、御自身の枉（まが）れる心に気づかれたのでありまじょう。そこに相手の缺点が見えればむしろ相手をたすけ、あわれまねばならぬのに、又しても煩惱に閉ざされ、瞋恚（しんに）と愚痴におちる身を省みられては、「篤く三宝を敬う」という道一つに光明を見出されたのであります。「それ三宝によりまつらば何をもちてか枉れるを直うせん」と仰言る太子

やがて御家庭にあっては「世間虚仮、唯仏是真」と常に述懐されていたのであります。言葉をかえて云えば、馬子の横暴の姿はまことに可哀相であるのに、自分はこれに徹底した同情心を注ぎ得ず、ともすれば相手の横暴によって自分自身が駄目になって行くのを悲しまれ、そのように「いかにいとおしふびんと思うともたすけとぐるること極めてありがたい身」に、仏の絶対無限の大悲の涙がそそがれていることを知られ、且つ慚愧し、且つ感謝された心のそのまが、前記の御述懐となったのであります。

さて二月は太子の御忌月であります。磯長の御廟に有縁の方々が相い参じて太子の御心を新らしく渴仰せられたこととでありましょうが、ただこれが太子のこと、尊いことと自分を除いて讃仰申しては太子の御心になんかかわいこととでありましょう。私共一人一人がこの太子の御体験を現に身にうけさせて頂くことが大切であります。

「師よ！師よ！といたずらに讃えるのが師を尊ぶ道ではない。すみやかに師の冠を取り着よ、その時こそ師が心から喜ばれるのだ」とニイチエは警告しております。

血のにじむ御苦勞のなかに、幸に慧慈、慧僧の二高僧を師に得られ、勝鬘、法華、維摩の三経を身読されて、心眼がおのずからに開かれたところから

ついに迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし云々と、先生の亡くなられる二ヶ月前に述べていられます。これこそ太子精神の再現とも申すべきことと思えます。

ひそかに仰ぎ見ますのに、弥陀仏の三十三の願に

「左といわれ仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが光明を蒙りてその身に触れんもの身心柔軟にして人天に超過せん。若ししからずんば正覺を取らじ」

とお誓い下さる御念力に催されて、私の瞋恚の煩惱の水がとかされるのであります。

私はこの消息を父の涙によって知らされはじめました。

それは私がまだ中学生の頃、体操の先生に反抗して学校から謹慎を命ぜられた時でした。当時寄宿舎におりましたがその間は家に帰らされました。その時「友達は旅行中だが、カッケで帰りました」と出まかせを云って父を誤間かしておりましたが、学校からの知らせで実情を知り、父は私を呼びつけて、一切を聞いたのちに、フト見ると父の眼に一杯涙をうかべて、「よう正直に云ってくれた。実は、父は庶子だったので少年の頃からよく他人から蔑視された。その時母が、どんな苦勞してもお前達を立派に学校を卒業させてやるから、馬鹿にする人々をやがて見くだすようになつておくれ！と慰めてくれた。そんなことで世間に対し

「和をもって貴しとなす」

の法灯が掲げられたのであります。その和は戦争に対する妥協的和ではありません。平和主義も抗争主義もいづれも妄想の織りなした迷いとして、このはてしない流転漂流の身をみそなわして、仏は際限（さいげん）の時あることなく住したまうて、迷える者のある限り無限の慈悲をもって私共の罪障を転じて功德にかえつくして下さる、そこにケンカ性のやまぬ者もおのずから和ぎの光を恵まれるのであります。ここに、この和ぎとは、仏より与えられ、恵まれる和ぎの心であって、わたくしにしてわたくしならぬもの、そしてケンカ性のやまぬ角の生えた心を徹底的に知らせて下さると共に、氷をとかして水とするように、転成して下さるのであります。卑近な例で申しますと、自分と自分を持てあましている時、尊敬し信頼するよき人にお会いしていると自然に心のしこりが融けて明るくゆたりのある心になられます。「賢に会えばおのずとゆたかなり」と仰言る太子のお言葉通りであります。

清沢満之師が「我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処する道開け、我、他力の救済を忘るるときは、我が世に処するの道閉す。……ああ、他力救済の念は、よく我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。……もし世に他力救済の教えなかりせば、我はて反抗心が強く、そのために父も度々失敗した。お前の上にもその反抗心の烈しいのを見て、可哀想でならぬ……」と云ってくれました。その後も私はこの反抗心の爆発で幾度か失敗をしましたが、その都度、火と燃えるのろいの中に、父の涙の顔が浮かぶのです、すると段々に、ゴムマリに針で孔をあけたように、瞋恚の空気が抜けて、やわらいで来たのであります。

歎異抄にも「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱（にゆうわんにく）の心もいでくべし、すべて往生にはかしこき思いを具せずしてただほれほれと如来の御恩の深重なることをつねに思い出しまいらすべし、しかれば念仏も申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然と申すなり云々とあります。

この柔和忍辱のころは、仏の願力の自然によって私が求めもせぬのに与えられるめぐみであります。全く泥田に咲く蓮華にも譬えられるものであります。

この世界は、仏力他力の働くところで、相対的な争いと和ぎを超えたものであります。そうでありますからやわらかな水も断崖にあうと物凄い滝となり、淵にあうと音もなく静まり、浅瀬ではせせらぎの音を立てて流れるように、太子の仰る和は同時にこの水のおもむきを持つのであります。

あとがき

二月は釈尊の入涅槃会が二月十五日、和の教主の聖徳太子の御忌が廿一日にありました。例年ながら心あらたまるものがあります。

又伝えられますところではコペルニツクスの五百年誕生祭の年でもあります。天動説のみに支配された全世界に、地動説を提唱し、世界の宗教界、思想界に、恐怖に等しい動搖を与えたことは歴史家の記すところでありますが、本年八百年の誕生会を迎えます親鸞聖人の、廻向の大転換、自力廻向から如来廻向を信証されましたことは、驚天動地の宗教の大改革でありました。ここに何時でも、何処でも、何人でも直ちに如来大悲の御手に救い遂げられる無碍道が開かれたのであります。また立教開宗七十五年を本山で提唱されますが、これは聖人が稲田の草庵で教行信証を作製されたという伝記によると思われ、聖人御自身にそうしたお心はおありでなかつたと信じております。

真宗とは真実の宗教であり、この言葉も善導大師にはじまり、法然上人が継承せられたものであります。唯可信斯高僧説と仰せられる聖人、親鸞わたくし無し、弟子一人も持たずと仰言る聖人には、そういう開宗とか、立教の御心はなかつたと思いません。

す。後世の人々がそう定めたものかと想像いたします。時間と空間をこえて、久遠を判那に、判那を不滅にあらわされた聖人、万人が何時でも何処でもうなずかされ、こばむことの出来ない真実のむねを光闡せられたのであります。このよき人、よき教を身にうけ御名を称えつつ信の旅を続けましょう。

おしらせ

三月下旬に、念仏詩抄の筆者、木村無相さんの詩集が出版されることになりました。約一八〇頁。三三〇篇。

念仏詩抄

木村無相著

定価、六百円、送料、八十円。

発行所、京都市下京区花屋町通西洞院西入、永田文昌堂。

振替口座、京都九三六番。

木村さんは在家出身で、青年の頃感ずるところがあつて人生問題から仏教に救いを求め、はじめ有縁の真言宗によつて法水を汲もうとされたが、そこに今度の極難の真宗の教を聞きはじめ、そこに信は極難の信をやという程知らされ、念仏の行にゆきつまり、信心を求めて得られず、最後に、本願の大悲一つに光を与えられたのであります。「誓願不思議にたすけられまいらせて」の歎異抄一章をいつも繰り返し深く信味していられます。現在京都東本願寺同朋会館に勤務されています。

御案内

○毎月第一、三、三日曜、午後一時半、南区駄上町二ノ八八。一道会館、例会。
市電、新郊通り一丁目下車
東入ル、三筋目、左入ル二軒目

○毎月二十四日、午前、午後。

昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円(送共)
一年 八〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫
電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野穂 志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八
発行所 慈 光 社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
那便番号 四五七